TS（トータル・サティスファクション）を目指して㉒

「名前を呼びましょう」

校長室担当より

相手の名前を知っているのに、それ以外の呼び方で呼ぶことはありませんか。

以前にもご紹介した、サッカージャーナリストの大住良之さんは、高校時代のエピソードを次のように語っておられます。厳しい結果のテストを返却された際に、その中の一つの問題で誤解答とされたことに担当の先生に説明を求めると、納得できる説明をしてもらえなかったばかりか、校内の別の場所でその先生に会った時、「そこの欠点！」と呼ばれたそうです。同じ学校現場にいる者として、どう感じられますか？当然のことですが、このことは今でも大住さんの心に深く傷として残っているそうです。

サッカーの試合でも、審判が選手を「（背番号）10番！」とか、選手が審判の方を「レフェリー！」と呼ぶことがあります。もちろん、名前を知らない場合には問題ないとは思います。ただ、名前を知っているのであれば、「〇〇さん」という呼称を用いることが、いろんな意味で大切であることを示す場面がありました、あるＪリーグの試合でのある審判の方が、試合中にケガをして倒れた選手への声をテレビ放送のマイクが拾っています。「〇〇さん、大丈夫？・・・（以下省略しますが素晴らしい気遣いの言葉です）」と声をかけています。この「〇〇さん」の部分が「〇〇番（の選手）」であったら、どうでしょうか。Ｊリーグの選手、審判は皆有名な方が多いのですが、お互いが名前を知っているにも関わらず、このような呼び方をすることは、「上から目線」「敵意識」とかといった類のネガティブな発想や冷たくて無機質な印象を生んでしまい、お互いが一緒に試合を作っているという思いの共有度は全く異なってくると思います。夫婦のような親しい仲でも、「おい」や「ねえ」と呼ぶことと名前を丁寧に呼ぶことには、大きな差があることと同じだと思います。

私たちの社会では、なかなか名前で呼ぶことをせず、役職で呼ぶことが礼儀であるという考え方があります。実際、私はある先輩の先生から、上司については役職名「教頭先生」で呼ぶように厳しく指導されたこともあります。しかし、名前を知っているのであれば、誰とでも丁寧に「〇

〇さん」「〇〇（教頭）先生」と名前で呼び合うことは、お互いの立場を超えて平等であるという「リスペクト」の精神を示すことになり、さらにはオープンマインドな組織風土の醸成にもつながるのではないかと私は考えています。

アメリカのビラノバ大学経営大学院の学部長を務めていらっしゃるジョイス・ラッセルさんによると、「人の名前はその人のアイデンティティーと人格ととても密接につながっている。」と説明しておられます。そして、「名前を呼ぶこと」には、他者の注意を簡単に引くことができること、礼儀正しいという印象を他者に与えることができること以外に、「自分は尊重されている」と他者に感じてもらえることがその効果として期待できると分析しておられます。

今回、相手の名前を丁寧に呼ぶことは、「相手へのリスペクト」であるということを改めてお伝えさせていただきました。これも私たちの日常の生き方の基本姿勢に加えることで、子どもたちに良いお手本を示していきましょう、一緒に。（令和４年６月２２日）

本校教職員として目指す方向性（確認）

※令和３年４月１日にお願いしたこと

１　トータル・サティスファクションの実現

２　学びに向かう力をもつモデルを率先垂範

３　対話とパートナーシップに基づく行動

４　全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現

５　「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の考えを戒める